

I. 導入

おはようございます。先週のメッセージでは、ふたりの弁護者が私たちのためにとりなしてくださっていることを学びました。それは、イエスと聖霊です。そして、聖霊の満たしを願い求めることを強くお勧めしました。それは、イエス・キリストの福音の証人として役立つものとなるためです。今日は、私たちの人生において、さらに神の御霊を求め、門をたたき、探すことを続けてお勧めしたいと思います。

私たちの人生にさらなる神の臨在を求める過程での重要な要素のひとつは、学びをとおして神をよりよく知ることです。今朝いくつかのことを学びますが、中でも三位一体について時間をかけて学びたいと思います。これから使徒言行録1章6-11節を読みますが、そこで御父、御子、聖霊についてどのようなことが示されているか見てみましょう。

II. 聖書朗読 使徒言行録 1:6-11 (新共同訳)

1:6 さて、使徒たちは集まって、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねた。 1:7 イエスは言われた。「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。 1:8 あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」 1:9 こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。 1:10 イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、 1:11 言った。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」

III. 教え

弟子たちは「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」(1:6)と尋ねました。この時点で彼らが未だ地上での王国を期待していたことが、この質問からわかります。イエスは多くのことを教え、示されましたが、彼らは理解していませんでした。当時のユダヤ人と同様、弟子たちが期待していたのは、イスラエルからローマ帝国の兵や総督が追放されることと、神の王であるメシヤが統治するイスラエル王国の再建でした。しかし、イエスはこう答えておられます。「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。」イエスは、イスラエル王国が将来再建されることを否定してはおられませんが、それがいつであるかは知らされない、と言われました。

これ以前にも、**マタイ 24章36節**で、イエスは終わりの時について弟子たちにこのように話されました。「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである。」今日の聖書箇所でも、もしイスラエルの再建が起こるのであれば、それは終わりの時である、とイエスは指摘しておられるようです。そして、保守派の聖書学者の多くは、イスラエル王国の再建は、イエスがエルサレムの王として君臨される千年王国の時代に起こると信じています。

しかし、今日みなさんにお分かりいただきたいのは、父なる神しか知らないことがあるということです。イエスご自身も、終末がいつやってくるかご存知でないのです。ここで疑問がわきます。もしイエスが神であるなら、イエスがその時を知らないということはあるだろうか、という

疑問です。神が節度のあるお方だと知れば、その答えはわかるでしょう。御子なる神という立場から、イエスはすべての知識にアクセスできるお方です。しかし、御子なる神として、イエスはご自身を制御することを選ばれます。御父なる神に敬意を表し、ご自身の知識を制限されるのです。父、子、聖霊の三位一体の神は、それぞれの位格が等しく神であります。ですから、それぞれがすべての力と知識を持つ権利をお持ちです。しかし、神の知恵とご計画のうちに、それぞれのお方が個々の役割をすすんで担われるのです。

イザヤ書 6 章には、イザヤが神の預言者として召された時のことが記されています。決断の時が、**イザヤ 6 章 8 節**でこのように記されています。これは非常に興味深い箇所です。「**そのとき、わたしは主の御声を聞いた。『誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか。』わたしは言った。『わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。』**」この箇所で、イザヤは主の預言者として行くことと自発的に申し出ています。しかしここで、もうひとつの決断の声がこだましているのではないのでしょうか。それは、御父の「誰を遣わすべきか」という問いかけ、また三位一体の「誰が我々に代わって行くだろうか」という問いかけであり、イエスの「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」という応答です。

もしイザヤ書 6 章 8 節をこのように読むことができるなら、人類を救う神のご計画をもたらす決心を主がなさったことがわかるでしょう。また、その決断をもって、神の三位格がそれぞれ固有の役割を担うことを承諾されたこともわかるでしょう。**詩篇 2 篇 7 節**を見てみましょう。「**主の定められたところに従ってわたしは述べよう。主はわたしに告げられた。『お前はわたしの子／今日、わたしはお前を生んだ。』**」この箇所は、神の救いのご計画の中で御父と御子の役割が確立された時点のことを語っているようです。

三位一体の概念を理解すると、多くの聖書箇所が理解しやすくなってきます。父、子、聖霊はみな神であり、等しい力と同一の本質を持っておられます。唯一の神の三位格なのです。しかし、神のご計画の中でそれぞれが特定の役割を担っておられるのです。では続いて、**使徒 1 章 8 節**を見てみましょう。「**あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。**」ここでイエスは、神のご計画をより詳しく示しておられます。

神のご計画の次の段階は、教会時代と呼ばれます。聖霊が教会に力を注ぐ中心的役割を果たし、教会がイエスの福音を地の果てまでもたらす時代です。さて、神は天から直接世界中に語りかけ、福音を広めることがおできになりました。または、御使いを送って数分のうちに全世界のすべての人に福音を知らせることもおできになりました。しかし、神の完全な知恵のうちに、神は弟子たちを用いて良き知らせをまずエルサレムに、そしてその他の場所へと一歩一歩、長い年月をかけて広めることを選ばれたのです。神がなぜこの方法を選ばれたのか私たちにはわかりません。しかし、神の働きにこのように関われる特権を与えてくださったことに感謝し喜ぶことができます。

使徒 1 章 9 節「**こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。**」イエスはよみがえられて 40 日後、天に昇り、父のもとへと帰られました。それ以来、イエスは天からご自分の教会を見守っておられます。そして、イエスの昇天の 10 日後、聖霊が力をもって弟子たちに下られました。このことについては、**使徒 2 章**に記されています。

もちろん、イエスがおられなくなって弟子たちは途方にくれたでしょう。しかし主は、彼らに助けを備えておられました。おそらくふたりの御使いだと思われるふたりの人があらわれ、補足説明のようなことばを語ります。「**イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、言った。『ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。』**」

イエスが、天に昇っていかれたのと同じイエスが、天に行かれたのと同じ有様でまたおいでになるのです。これは、再臨が実際に目に見える劇的な形で起こることを意味します。イエスが再臨されたら、誰もがそのことに気づくでしょう。マタイ 24 章 30 節は、その様子をこのように表現しています。「そのとき、人の子の徴が天に現れる。そして、そのとき、地上のすべての民族は悲しみ、人の子が大いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見る。」

イエスが再臨されるまで、私たちは教会時代に生きています。教会時代は歴史上、逆説的な時代と言えるでしょう。なぜなら、イエスがすでに罪と死に勝利を得られたことをわかっているのに、罪と死を体験する時代だからです。弟子たちは、メシヤの来臨により物事が明らかに一変すると想像していました。古いものはすべて過ぎ去り、イスラエルの新しい王国がすぐさま確立されると思っていました。しかし、神のご計画はそれとは少し違いました。古いものは終わりの時まで続き、同時に、新しいものが伝えられるのです。

ニッキー・ガンベル師は、アルファ・コースで、このような簡単な図を使ってこの考えを説明しています。罪、苦しみ、死のある古い堕落した世は、まだ続き、再臨まで続きます。しかし、十字架の時から新しいことが始まっています。そして、神の御国が教会をとおして具現化されています。聖霊の力により、神はすでに私たちの心の中と信徒の交わりの中に御国を来たらせてくださっています。御霊によって歩み、人生の中に御霊の実と御霊の力を持っているなら、私たちは神の御国における多くの祝福にすでにあずかっています。イエスが再臨されるまで、御国をフルに体験することはもちろんできませんが、それまでの間も、キリストの喜びと平安を体験することはできます。そして、超自然的な癒しなどの奇跡も見ることがあるかもしれません。神の支配をこのように経験するのは、私たちにとって祝福であり、励ましです。また、この世にとっては、神の愛を示す証です。



今日の聖書箇所には、父、子、聖霊が登場します。ですから、三位一体について話すのに良い機会だと思います。三位一体がすべて聖書の一節に登場することもあります。マタイ 28 章 19 節がその例です。「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、」とあります。ここで、三位一体の教義にあるように、父、子、聖霊が等しく挙げられ、唯一の神の三位格の存在を示しています。

「どうやったら 3 イコール 1 になりえるのか」というような単純な問いを使って、三位一体の教義に異議を唱える人もいます。しかし、この種の疑問は、概念を正しく理解していないことから起こります。3 つのりんごはもちろん 1 つのりんごではありません。それは明らかにナンセンスです。しかし、1 つのりんごが 3 つの味わいを持つことは可能です。皮、果肉、種はそれぞれ異なる味がします。同様に、三位一体の「一」は、三位一体の「三」と同じことに関して使われているわけではありません。ですから、三位一体の教義に矛盾はないのです。

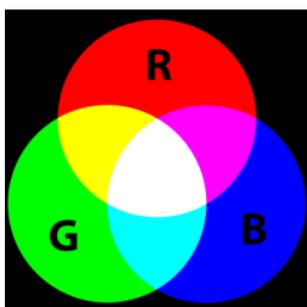
神が唯一のお方だと言うとき、それは、目に見えない神の本質や神の完全な一貫性をさしています。そして、三位格が等しく神であると言うとき、それは、父、子、聖霊が個々の特質と神の特質を持っていることを聖書が示していること、同時に、神は唯一のお方だと聖書が示していることをさしています。聖書は、神が唯一のお方であることを明らかに語っています。同時に、聖書は、神が父、子、聖霊という三位格のお方であることも示しています。

神は三位一体のお方です。そして、人は神に似せて造られたものですから、人が三位一体であっても不思議はありません。テサロニケ第一 5 章 23 節には、こうあります。「どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も魂も

体も何一つ欠けたところのないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように。」私たち人間は、霊、魂、そして体があります。3 つそれぞれがその人ですが、それが一人の人を作っているのです。

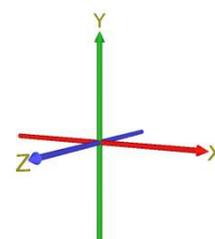


三位一体の概念を理解するのに役立つ類推が自然界にいろいろ存在します。水、氷、水蒸気はまるで異なったものですが、本質的にはすべて H_2O という同じものです。水の分子である H_2O があるだけです。しかし、自然界では水、氷、水蒸気という3つの違ったものとして存在します。



三位一体のもうひとつの例は光です。人間の目に見える色は、赤、緑、青という光の三原色から作られています。赤の光、緑の光、青の光はすべて光です。それぞれは光の特性を持っており、性質上まったく同じです。すべて光です。その3つが合わさると、私たちの目には白色にしか見えません。

数学次元を使って簡単に次のような論理を試してみると、三位一体の概念の正当性が示されます。時間という次元を無視すれば、私たちは、縦、横、奥行という三次元の空間に生きていると言えます。これを表すのに、X、Y、Zの図がよく使われます。しかし、もしXとYしかない二次元の世界があったらどうでしょう。紙切れ一枚よりも薄くて平らな世界です。



今日、私は友達の平くんを連れてきました。平くんはこのボード上に表された二次元の世界に住んでいます。平くんの世界を想像できるでしょうか。彼の目からは物はどうのように見えているのでしょうか。平くんの世界には二次元しか存在しませんから、その平らな世界以上もそれ以下も理解することはできないでしょう。私が手を彼の前に置いたとしても、彼の世界に触れない限り、平くんがそれを見ることはないのです。



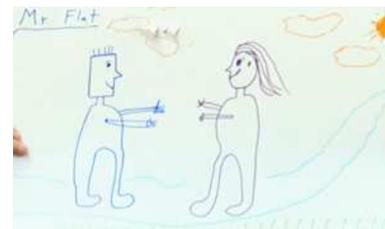
では、平くんの世界に円を描いてみましょう。平くんには何が見えるでしょう。彼には円の縁しか見えません。ですから、彼の目には、一本の線に見えるでしょう。では三角や四角はどうでしょう。それも一本の線に見えてしまいます。平くんの二次元の世界では、その周りを歩いて角に触れて確かめない限り、円も三角も四角も、違いがわからないのです。

平くんの世界に私が穴を開けて指を入れてみるとどうでしょう。平くんには何が見えるでしょう。二次元の世界以上もそれ以下も理解できないのですから、彼にとって私の指は円と同じです。ですから、彼には私の指も一本の線にしか見えません。私は、平くんの世界を作りました。そして、平くんを描くことで彼の存在を作り出しました。ここで私は、平くんに話しかけることにします。「平くん、こんにちは。私はあなたの世界を作り出しました。私はあなたの神です。」彼は私を信じるでしょうか。彼にとって、私はただの線のように見えます。平くんが注意深く調べたとしても、私はただの円です。彼を説得するために、奇跡を起こすこともできるかもしれませんが。彼の前に現れて、また消えることもできます。彼の世界の草の色をマジックで違う色に塗ることもできます。彼の世界から太陽を消し去ることもできます。しかし、平くんが私を見ると、私はそれでもただの線です。それが二次元の世界の限界なのです。

では、彼の世界に私の指を三本入れてはどうでしょう。平くんは3本の線を見るのですが、私は彼にこう言います。「あなたにとって、私は3本の線に見えるでしょう。でも実際には、私は

ひとつなのです。私は手なのです。」ここで、私が自分の力を表すためにどれほど多くの奇跡を行ったとしても、3本の線に見えるものは実はひとつで手と呼ばれるものだということを信じるかどうかは、平くん自身が決めなければなりません。

平くんには二次元しかなく、私たちには三次元あります。しかし、神は何次元のお方なのでしょう。私たちは知る由もありません。神は時空を超越したお方です。神の存在と神の世は、私たちの理解の及ぶところではありません。しかし神は、多くの奇跡や、多くの預言の成就によって、この世の時空を越えてご自身が存在されることを証明されます。そして、聖書の中に、神は父、子、聖霊という三位格を持つ唯一の神であられることを示されました。問題は、私たちが信じるかどうかです。神がどれほどの証拠を与えてくださろうと、信仰の一步を踏み出す必要はあります。なぜなら神は私たちの理解を超えるお方だからです。



ではもう一度、平くんを見てみましょう。平くんがガールフレンドができました。彼は自分の体験を彼女に話します。自分たちの世界を作った手との遭遇についてです。彼女は一度もその奇跡を見たことがありませんが、彼の証によって、信じることにしました。ふたりは結婚して、深く愛し合い、強い絆で結ばれた夫婦となりました。けれども、この二人がどれほどお互いの結びつきを強めたとしても、私はもっと深い意味でこの二人に関わることができます。それは、私には二人の考えていることが見え、心の奥底に触れることができるからです。彼らは互いの外面しか見えませんが、私は内側を見られるのです。私は彼らの心の中に常にいることもできます。なぜなら、私は彼らの世界を超越しているからです。

神にとって、私たちが何を思っているか見るのはたやすいことです。そして、私たちの心に触れることもできます。それは、神が三次元の小さな世界にとらわれていないお方だからです。神の世界が何次元か私たちにはわかりません。もしかすると、神は無限の次元に存在され、時空を超越されるのかもしれない。または、次元という世界観をもって神の存在を説明することはできないのかもしれない。

IV. 結論

神について理解できないことはいくらでもあります。しかし、神はみことばを通して私たちに語ってくださいます。そして私たちは、神が示してくださったことを信じるという選択ができます。神が示してくださった重要なことのひとつが、神が父、子、聖霊の三位一体のお方であるということです。イエスが洗礼を受けられる場面は、三位一体の三位格がすべて登場するもうひとつの聖書箇所です。イエスが洗礼を受けられ、聖霊がくだられ、御父が天から語られる、この場面を最後に読みましょう。マタイ 3 章 16-17 節「イエスは洗礼を受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった。そのとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と言う声が、天から聞こえた。」

V. 祈り